教師課題案１　南泉斬猫（なんせんざんみょう）

本日は、無門関（むもんかん）という禅仏教の公案集に収められている「南泉斬猫」という禅問答を紹介します。はじめに、禅問答の概要について説明し、次にこの禅問答の内容を紹介します。最後に、解説と補足をおこないます。

まず、禅問答とは禅宗における修行方法の一種であり、禅の指導者と弟子との間で交わされる一連の問答や動作のやり取りです。また、禅僧たちが行った禅問答を後の修行者たちのために記録したものを公案と呼びます。

禅問答において、修行者たちは師匠からの問に適切に答えることによって、禅の真理を悟ることができます。しかし、意味の分かりにくい話について「禅問答のような話だ」と形容するように、禅問答は理解するのが極めて難しいです。これに関して、世界的な仏教学者である鈴木大拙の著作『禅問答と悟り』では、「禅問答の特色は、知的ではない、論理的でも、説明的でも、解釈的でもない。また、単なる啓蒙的でもない。教訓的でもない。俗に言う「体当たり」的である。それ故、一問一答でなければ、発展しても二、三度の往復あるにすぎぬ。知的でないから発展性がない。従って対話とはならぬ。」と説明されています。

禅問答は、禅仏教の基本的な精神である「不立文字」と「教外別伝」に基づいています。「不立文字」とは、真理は言葉や文字によっては伝えきることができないという意味です。また、「教外別伝」とは、真理は文字によって書かれた経典によってではなく、心から心へ直接伝わるという意味です。こうした、「不立文字」・「教外別伝」の精神が、禅問答を論理的な思考によって理解することを難しくしていると考えられます。

それでは、これから禅問答「南泉斬猫」についてお話いたします。

唐の時代のころ、池州南泉山（ちしゅうなんせんさん）に普願禅師（ふがんぜんじ）という僧侶がいました。この僧侶は、お寺のある山の名前にちなんで、南泉和尚（なんせんおしょう）と呼ばれていました。

ある日、お寺にいる南泉和尚の弟子たちがみんなで草刈りのために出かけると、一匹の子猫が現れました。この地域では猫は珍しかったので、弟子たちはこの子猫を追いかけ回して捕まえました。そして、東堂のペットにするか、西堂のペットにするかで言い争いを始めました。

　この様子を見ていた南泉和尚は、子猫の首をつかんで、草刈りの鎌を突きつけて、こう言いました。

「お前たち、禅の真理を悟るにはどうしたらいいかを言え。言えるならば、この子猫を助けよう。そうでないなら、斬り捨てよう。」

しかし、その場にいた者は誰一人として答えることができなかったので、子猫は斬り捨てられてしまいました。

その日の夕方、南泉和尚は一番弟子である趙州（ちょうしゅう）にこの出来事について話しました。すると趙州は、履いていた草履を頭に乗せて、帰ってしまいました。それを見て、南泉和尚は「ああ、お前がその場にいてくれたら、子猫も助かったのになあ」と嘆きました。

以上で、南泉斬猫の話は終わりです。いかがでしたか？

南泉斬猫の問答は解釈が難しいことで有名です。三島由紀夫の代表的な小説『金閣寺』では、主人公の師匠である住職がこの禅問答の解釈を話すシーンがあります。

それによると、まず南泉和尚が弟子たちの前で猫を斬り捨てる場面については、「南泉和尚が猫を斬ったのは、自我の迷妄（めいもう）を断ち、妄念妄想（もうねんもうそう）の根源を斬ったのである。非情の実践によって、猫の首を斬り、一切の矛盾、対立、自他の確執（かくしつ）を断ったのである。」と説明されています。すなわち、子猫は南泉和尚の弟子たちにとって、心の迷いや、それによる弟子同士の争いを引き起こす原因と考えられ、南泉和尚は子猫を斬り捨てるという実力行使によってその原因を無くしたのだと解釈されています。

また、南泉和尚の一番弟子趙州が履いていた草履を頭に載せて帰っていく場面については、「泥にまみれ、人にさげすまれる履というものを、限りない寛容によって頭上にいただき、菩薩道を実践したのである。」と説明されています。すなわち、汚い草履を頭に乗せるという行為は、世間の中に入って苦しみを受けながら民衆を救う菩薩としての修行の象徴として解釈されています。したがって、そうした修行を象徴する行為を行う趙州が、もし子猫を巡る争いの場にいて同様の行為をしたとすれば、そのことにより南泉和尚の発した問に正しく答えたこととなり、子猫は斬られずにすんだはずだったということになるのです。